

憲法と映画(113) 『ナースコール』(スイス・ドイツ合作)

<かな>



娘が主人公と同様、看護師をしていて夜勤ともなれば遠慮なく(?)孫守りのため、ジジ・ババにも呼び出しのお助けコールが入ってきます。そのたびに高速道路を車で2時間かけて駆けつけることになります。

主人公・フロリアも子育てしながらとある州立病院の外科病棟に出勤する中堅のナースです。映画は、彼女の遅出のバス通勤場面から始まり、辺りが暗くなった時間に退勤のバスに乗るまでの一日を息をもつかせぬハイスピードでドキュメンタリータッチに追いかけます。プロ意識が強くまじめな彼女はその日、26人の患者をたった2人の看護師で担当することになります。人手不足が常態

化している職場はただでさえ手一杯なのに、インターンの看護学生の指導もしなくてはなりません。椅子に座ることも休憩することもできずに病棟内を走り回る姿は、命と向き合う病院の過酷な労働現場を余すところなく伝えてくれます。

何とか病気の不安や孤独感を抱えた患者たちに誠実に接しようとするフロリアですが、点滴の交換、検温、血圧測定、採血、薬の調合などの業務以外にも、「お茶が欲しい」だの「早く主治医を連れてきて」だのと患者の要望やクレームがひっきりなしに入ります。緊急のブザーでナースコールが入ればその対処を迫られ、とてもひとりの手には負えない苦境に陥っていきます。やがて気丈な彼女も極限の混乱の中、投薬ミスを犯して患者の一人がアナフィラキシーショック状態になって打ちひしがれ自信を無くします。その日一度も病室に顔を出さなかったために症状の悪化に気づかず、救命措置もむなしく亡くなる患者が出たりと重大な試練に直面することに……。

人の命を預かる尊いはずの仕事がその過酷な勤務の現状にただただ驚かされます。映画のエンドロールで「2030年にはスイスで3万人の看護師が不足。世界中では1300万人が不足する。」と流れます。

ドイツ語原題は「HELDIN(ヒロイン)」ですが、そんな華やかさは微塵も感じられない看護の現場がありました。(かな)